

## シューマン：交響曲第4番二短調 Op.120

シューマンは集中してひとつのジャンルの曲を書き続ける癖があり、「歌曲の年」の1840年、「室内楽の年」の1842年はとくに有名だが、その中間に位置する1841年も、シューマンの「交響曲の年」と呼ばれる。それは「春」の愛称で親しまれている《交響曲第1番》と二短調の交響曲とが作曲されたことによるが、この二短調の交響曲は初演後すぐにシューマンが改訂を決意し、出版しないまま手元に置いたままになっていた。

「第2番」になるはずだったこの交響曲が《交響曲第4番》として復活するのは、それから約10年が経過し、交響曲第3番（「ライン」）の成功により大きな自信を得た後の、1851年のことだった。当時ライン河に面したデュッセルドルフ市の音楽監督をつとめていたシューマンは、1853年3月、自身の指揮でこの曲を初演している。

この交響曲の改訂当初のタイトルは、「シンフォニック・ファンタジー」すなわち「交響的幻想曲」であった。最初にこう名づけたのには、もちろん理由がある。「幻想曲」は一般に、ロマン主義的な自由な形式の楽曲に付けられるタイトルだが、この交響曲もその条件を満たしているからである。第一に、スコアを見ると4つの楽章が完全に独立しておらず、一続きの音楽として発展していくこと、第二に、4つの楽章、なかでも第1楽章と第4楽章に同じ主題が使われて、音楽が楽章をこえた広がりを見せていることなどが挙げられる。

初演から数ヶ月後、シューマン家を一人の作曲家が訪れる。それがブラームスであった。シューマンは自らが発行する音楽雑誌に、「新しい道」という題でブラームスの才能を絶賛する文を書いた。なお、ブラームスはこの交響曲の改訂前の初稿を所有しており、価値あるものとして後に出版もしている。しかし、今日一般に演奏されるのは、改訂版の方である。

**第1楽章：かなり遅く～生き生きと 二短調：**さまようような序奏の後、テンポが上がって主部が現れる。この主部の主題は第4楽章で再び登場する。

**第2楽章：ロマンツェ、かなり遅く イ短調：**オーボエ独奏の哀愁を帯びた旋律で始まる。中間部では独奏ヴァイオリンも活躍する。

**第3楽章：スケルツォ、生き生きと 二短調：**第2楽章最後の和音（二短調の属和音）から自然にこの楽章に移行する。中間部は長調に転じる。

**第4楽章：遅く 二短調 ～ 生き生きと 二長調：**第3楽章の延長として開始され、序奏ではヴァイオリンが第1楽章主部の主題を遅いテンポで再現する。続いて二長調の快活な主部となり、フーガの手法も取り入れながら曲は高揚感を増していく。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。